デュルケームの初期著作における社会主義の問題

小関藤一郎

I.

デュルケームの著作で著書としての生存中に刊行されたものは「社会分業論」[1] (1893年),「社会学方法論」[2] (1895年),「自殺論」(1897年),「宗教生活」[3] (1912年),「戦争の張本人は誰か」*Qui a voulu la guerre* (1915年) [4],「万国に冠たるドイツ－ドイツ人の心性と戦争」*L'Allemagne au-dessus de tout —la mentalité allemande de la guerre* (1915年) の六つである。最後の二つは第一次大戦の勃発後フランスの戦争遂行に対する協力の産物であるから，本来の意味の社会学的著作ではないが，デュルケームの社会観を見る上では重要な文献である。このほか，祖国の戦争遂行への協力としてデュルケームが編集の責任をとり、彼自らもそこに執筆した編著に「全フランス人に対する書簡」*Lettres à tous les Français* (1916) がある。それとデュルケームの大きな仕事としては1898年から刊行された社会学年報 *L'Année sociologique* 12巻の編集刊行があげられなければならない。この中に彼は「近親婚の禁止とその起源」*La prohibition de l'inceste et ses origines* などの重要な論文六つを執筆している。ところが彼の死後，生前の講義の原稿など遺稿を元にして刊行された著作は次のように多くの数に上っている。(以下刊行の年順に記す)

1．パリの大学生活 *La vie universitaire à Paris* (1918) デニルケームはこの一部 (*part* I) を執筆している。

2．教育と社会学 *Education et sociologie,* 1922 (*Paul Faucnnet* の序文付) —(なお1960年に新版が刊行されたが，これは *Maurice Débesse* の前文が

付されている)

3．社会学と哲学*Sociologie et philosophie,* 1924（*Célestin Bougléの*序文付）

4．道徳教育 *L'éducation morale*,（*Paul Faucounet* の前文付）

5．社会主義 *Le socialisme*, 1928（M.Mauss の序文付，なお 1971 年新版が刊行され，これには Pierre Birnbaum の前文が付されている。さらに Annie Kriegel の前文を付した新しい版が 1978 年 Retz 社から刊行された。）[5)]

6．フランス教育思想史 *L'évolution pédagogique en France* 1938．（当初は(1)起源からルネッサンスまで，(2)ルネッサンスから現代までの二巻に分れていたが，1969 年改訂版では一巻に合本された。Maurice Halbwachs の序文付）P.U.F. 刊行

7．社会学講義 Leçons de sociologie.—physique des mœurs et du droit, 1950（H.N.Kubali（トルコの社会学者）の前文と G,Davy の序付）

8．モンテスキューとルソー *Montesquieu et Rousseau, précurseurs de la sociologie,* 1953，（Armand Cuvillier の前文とG.Davy の序文付）*Marcel Rivière* 社刊行

9．プラグマティズムと社会学*Pragmatisme et sociologie, 1955. Vrin*社刊行

以上のほか，デュルケームの論文や書評などをまとめて刊行されたものに，次の二つがある。その一つはデュヴィニヨー Jean Duvignaud が序文を付し編集した論文集 *Journal Sociologique*（1969 ,P.U.F,）である。これは社会学報に執筆されたデュルケームの論文，六つと数多くの書評の中から重要と考えられたものをまとめたものである。この中に収められた論文は上記の「近親婚の禁止とその起源」のほか，「宗教現象の定義」 De la définition des phénomènes religieux.（年報第二巻）「刊法発展の二法則」Deux lois de l'évolution pénale.（年報第四巻），「トーテミズム」 Sur le totémisme,（年報第五巻）「分類の未開形態」 De quelques formes primitives de la classification（年報第六巻），「オーストラリア社会の婚姻組織について」 Sur l'organisation matrimoniale des sociétés australiennes（年報第八巻）の五つであるが，このほかに書評 notes

critiques 100 点以上と各種の重要な註記 notes が収められている。もう一つは J.C.Filloux の序文，と Filloux が選んだ論文書評 15 点を収めた「社会科学と行動」 *La science sociale et l'action*, 1970 , *P.U.F* である。この書は第一部社会学論。第二部社会学と社会主義。第三部状況に面しての社会学者，第四部人間と云う構成をもち，第一部には 1．ボルドー大学における社会学の開講の辞，2，19 世紀におけるフランスの社会学，3．社会学と社会諸科学，二部では[6]フィエの A.Fouillée 著「社会的財産と民主主義」 *Propriété sociale et démocratie* の書評。(2)社会科学の諸研究（スペンサーなどの書評）(3) 1789 年の原理と社会学。(4)社会主義の定義。(5)社会主義と社会科学[7]。(6)唯物史観論[8]から成り，三部は(1)個人主義と知識人」 *L'Individualisme et les intellectuels*(2)知的選良と民主主義 L'élite intellectuelle et la démocratie, (3)国際主義と階級闘争 L'Internationalisme et lutte des classes, 4．平和主義と愛国主義 Pacifisme et patriotisme の論文と討論からなり，第四部は宗教に関する論文二つ 1．宗教の将来 L'avenir de la religion, 2．人間性の二重性とその社会的条件 Le dualisme de la nature humaine et ses condtions から成っている。こうしたいわば論文集ともいうべき二つの編著につづいて，1976 年 V.Karady によってデュルケームのテキスト三巻が刊行された（*Les éditions de Minuit*）。このテキストによって，それまでに収められていなかったデュルケームの著作はほとんど網羅されて刊行されたといえる。 それにしても，死後 50 年ではなくほとんど 60 年目で，はじめて著作業績が全部刊行されたということは，他には余り例のみられないことであろう。

ところで， Jean Duvignaud 編の *Journal Sociologique* と J.C.Filloux 編の *La science sociale et l'action* の二つの著作と V.Karady 編になるテキスト三巻において，特に注目されるのは，デュルケームの著作全体において書評[9]の占める位置がきわめて大きいことである。 Nandan の調査によると[10]，「社会学年報[11]」に収められている書評の中デュルケームの執筆したものは 324 あり，「年報」全体に掲載された 1531 にのぼる全体の中の 15.5 %をしめており，モ

ースの 312（15％）とも書評の双壁をなしているが，デュルケームはわずかではあるがモースを上廻っている。これはしかし，「年報」だけについてみたもので，年報以前にも哲学雑誌 *Revue philosophique* などにかかれたものも非常に多い。デュルケームが社会学者としての活動の最初に行ったのは 1885 年の *Revue philosophique* に発表されたシェフレ A.Schäffle の著作 *Bun und Leben des sozialen Körpers* 1. Band (1884)[12]についての書評である。これについで同じ年にグロンプロヴィッツ L.Gumplowitz の *Grundriss der Soziologie* (1884) についての書評[13]およびフィエ A.Fouillée の *La propriété sociale et la démocratie* (1884) の書評も発表されている[14]。こうした書評はその後もひきつづいて発表され，「年報」第一巻刊行までに発表されたもが上記の三つを含めて 13 を数えられるほか，覚書 *(note)* として書かれた「シェフレーの経済網領」*Le programme économique de Schäffle*[15]などを含めると15ある。ところで，年報発刊頃までを初期とすると，これら初期の書評および論文には社会主義およびドイツの歴史学派の経済学者の書いた著作に関するものが非常に多いのが注目される。とくに「年報」に発表されたものに比べて，現実の社会経済問題に対する関心が強かったことが察知されるのである[16]。そこで，以下，この問題について少し立ちいって考察を進めてみることにする。

II

1．シェフレ

上述したように，デュルケームが行った最初の書評がシェフレの著作であったことは注意すべきことである。しかも 1885 年の書評が *Bau und Leben des sozialen körpers* Bd. I であっただけでなく，次の 1886 年に発表された Les études de science sociale においても他の著者の著作とならんで，同じシェフレの *Die Quintessenz des socialismus* (1885) がとりあげられている。さらに，1888 年にも「シェフレの経済網領」についてこの言及がなされている。デュスケームがこのように学的生活の最初にドイツの社会主義理論の一つについ

て関心を抱いたのは，モースがのべているように[17]，「すでにエコール・ノルマル・シュペリウールの学生時代，当時の政治的，精神的意欲の強い環境にあって，使命的に，親友ジャン・ジョーレスやオメイなどともに，社会問題の研究に献身的に深い関心を抱いていた。そしてその課題を当時すでに抽象的に，哲学的にではあったが，"個人主義と社会主義の関係" *Rapports de l'individualisme et du socialisme* として提起していた」ことによるものであることは周知のとおりである。おそらくそうした関心からデュルケームはシェフレの著作に接したのであろうが、注意すべきことはこの接触は彼の 1885 年後期から 1886 年前期までのドイツ留学中にはじまったことで，その意味でドイツ留学はデュルケームにとって重要な意味をもつものであったことは否定できない。それはラクロワ *B.Lacroix* やランデレ *B.Landerer* がいうように，「デュルケームの考え方のすべてにその初期におけるドイツの学者との出会によって与えられた刻印がきざまれている[18]」のである。デュルケームはドイツ留学の際シェフレを訪ねただけではなく，彼との関係は帰国後も続いているのである[19]。デュルケームはシェフレをよん読瀆んでいたようで，当時フランスでもよく知られたこの学者の著作 *Die Quintessenz des Sozialismus* についてはその訳（Benoit Malon による）が完全ではないと評し，ドイツ語の Zuchwahl が assimilation と訳されているのは談であると指摘しているほどである。シェフレがいかにデュルケームに大きい影響を与えたかは，ボルドー大学における社会学開講の講義において次のようにのべていることからも明白である。

「エスピナスが動物社会についてなしたのと同じことを，ドイツの一学者が人間社会について，というよりむしろ近代ヨーロッパの最も先進的社会について行なおうと試みた。A.シェフレはその四巻におよぶ「社会体の構造と生活」を現代ヨーロッパの諸々の代表的な社会の詳細な分析に棒げている。シェフレは，社会はたんなる個人の集合ではなく，それ独自の生命，意識，利害および歴史をもつことを原則として確立することを出発点としている。この考え方はすでにドイツでは活発に存在しつづけている。……彼はヨーロ

ッパの諸現代社会の巨大なメカニズムを少しずつ分解し，その諸機関を列挙しその機能を説明する。そこにわれわれは人びとを相互に結びつけている不可視のあらゆる種類の紐帯が多数区分され，分類されているのを見るのである。……この読んでみると，スペンサーの構築が現実の豊かさに比べていかに矮小で貧弱にみえることであろう。そしてスペンサーの理論の表面華やかな単純さもシェフレの忍耐強い労をおしまない分析に比べると，何と価値の低いことであろう[20]。」

そして最後にデュルケームは「社会学は経済学者とともに誕生したが，成立したのはコントともにであり，スペンサーとともに確立しシェフレとともに明確化した[21]」とのべて，シェフレのもつ意義を明かにしている。ところでシェフレは社会主義者であったのであろうか。議壇社会主義者シュモラーがシェフレーを賞讃している[22]ことから J.C.Filloux は[23]シェフレを講壇社会主義者と同じように考えているが，シェフレーは「社会政策の観点からは，私は社会民主党に属することもなく，また講壇社会主義の仲間でもない。講壇社会主義は本質的にその網領を限定し，生産者の労働を保護しようとしている。私の考え方は私の小冊子「社会主義の本質」においてそれ以上に進んでいる。私は(1)工業生産の多くの部門が連帯的な結合を可能なものとして主張する。(2)また中小の財産が同業組合的に結合することを主張する。そこから信用と生産の一つ組織化もできるであろう。そういう組織化は，すべての生産的労働に有利なように生産物の分配に強い影響を与えるためつくられるのである[24]。」とのべている。デュルケームもシェフレの社会主義は他の社会主義とは根本的に異っていることを認めるだけでなく，ドイツ留学から帰国後の報告において，シェフレをワグナーと比べて，同じように経済活動から道徳的な帰結を引き出しながら，ワグナーの犯した重大な誤診から大部分免れているとのべ，シェフレーが講壇社会主義者ではないと見ている。この報告の中で，さらにデュルケームはシェフレが道徳や法を集合的な圧力に応じて形成され，徐々に固定化された社会的機能または機能の体系であると見たことを高く評価している[26]。さらに社会主義

について，デュルケームはシェフレの社会主義が独裁的といわれるが，実はそうではなく組織的社会主義である，と見るのである。というのは工業生産力はシェフレにおいてはいくつかの作業中心 centres d'actions に結集され，その中心によって各生産力の協力が規制されることになる，つまりこの中心はそれぞれ相互に協力しあるいは命令服従の関係をつくり，そこから一の権威が構成されることになるからである[27]。シェフレは一面平準化的な民主主義を排除していて，それに対して組織的な複雑さに対する理解をもっていたのである[28]。しかしだからといって，シェフレは国家主義者であったのではないとデュルケームはいう。デュルケームによるとシェフレの社会主義の目的はたんに労働者の生活状況を改善するのにあるのではなく，もっと高次のもの，すなわち個人主義の実践が招来する余りにも分散化的傾向を一般的に克服することにあったのであった[29]。デュルケームのシェフレの経済綱領の紹介は正統派的自由主義的見解をもっていた経済学者ルロワ・ボーリュウ Leroy-Beaulieu に対する反論の意味をもたったようであるが，社会改革論者でもあるシェフレが社会の独自性を認めたことを高く評価したものであった。そしてデュルケームがシェフレの著作についで書評を行ったフィエの「社会的財産と民主主義」*La propriété sociale et la démocratie* に目をむけたのもシェフレの著作によってうけた刺激の大きかったことによるものとみることもできよう。

2．講壇社会主義者ワグナー，シュモラー

デュルケームはドイツ留学の際，シェフレーのほか多くの経済学者からも学んでいる。それらの経済学者とはワグナー A.Wagner シェモラー G.Shchmoller である。当時 1880－1890 年代はドイツで講壇社会主義論争が学界をわきかえらせていた時であったから，その論争の注視の的であるシュモラーたちにデュルケームが注目したのは当然のことである。デュルケームは帰国後，留学中の成果を報告しているが，その一つが「ドイツにおける道徳の実証科学」 La science positive de la morale en Allemagne (1887) である[30]。この報告の中で最初にとりあげられたのが，経済学者ワグナー，シェモラー，およびシェフ

レである。とくに講壇社会主義者であるはじめの二人の研究に注目し，デュルケームは，正統派経済学者たちが道徳という概念を結局は効用に帰着せしめるか，または経済とは全く関係のないものといる考え方とは異って，彼らが両者の間に関連をみようとしたことが特徴であるという。この点に関しデュルケームは次のようにのべている。「ドイツの経済学者たちは，道徳と経済は別の領域ではあるが，両者の間には連続的交渉が維持されているとみている。ただ，この両者の関係がどのようなものであるのかは明かにされてはいない。経済と道徳との完全な親密性 la parfaite intimité を明かにするためには，経済現象が道徳に影響をおよぼしていることを，若干の事例によって，示すだけでは十分ではなく，二つの領域の事実が同じ本質のものであることを証明しなければならない[31]。」ワグナーとシュモラーはこの証明のため，マンチェスター学派の社会観，社会を交換する人間の関係とみる見方を攻撃する。この二人によると，「社会は真の存在である。もちろん，それは構成員である個人を離れては存在しないが，それでも固有の特質と人格をもっている」[32]のである。社会はこうした市民の混⅓とした集合体に還元されないだけではなく，「社会的存在は固有な欲求 besoins をもち，その中には物的なものが含まれるから，それを充足させるため，経済的活動を制定し，組織化するが，それは特定の個人や市民の大多数にぞくするものでなく，国民全体にぞくするものである[33]。」国民経済 Volkswirtschaft という言葉はその意味に解さるべきで，ワグナーが Volkswirtschaft は現実の全体であるとのべているように，デュルケームはこの言葉を l'économie sociale と訳しそれは真の具体的現実であって，論理的実体ではないことがワグナーによっても明らかにされているという[34]。こうして，この二人によると，「経済学は何よりもまず社会的利益を問題とし個人的利益はその次に考慮されるにすぎない[35]。」そこで「現実には道徳の実践的役割は社会が生存していくことを可能にし，人びとが相互に衝突も戦争もなく共同して生活できるようにすること」，一言でいえば重大な集合的利益を擁護することにある[36]。だから経済学の目的も道徳のそれと類似したものになる。つまり，両者はとも

に，異った観点からではあるが，社会がどのようにして生存し，発展できるかを探求するのである[37]。ところで，古典学派からみると，この考え方は何等新しいものであるというかもしれない。しかしデュルケームによれば彼らにとってこの集合的利益は個人的利益の形にかえたものであるにすぎない[38]。しかるにドイツの経済学者にとっては，個人の利益と社会のそれとは常に合致するとは限らないものである。しかも彼らによると社会は個人の数量的総和以上のものだから，その各領域の機能の中に社会は固有な目的をもち，この目的は個人のそれを超えて拡がり，かつまたそれとは質を異にする。国家がわれわれから要求する経済的サーヴィスはいつも正確な互酬性によって支払われることはないが，われわれはそれを国家に対して奉仕として遂行する。それは個人的利益によってではなく，無私の気持からである。こうして経済学と道徳の間に密接な関係が存するのは，両者がともに無私の感情を動員させるからなのである[39]。講壇社会主義者たちの考える経済学の目的は社会的有機体の経済的機能だったのである。

ところで講壇社会主義者にとって，経済学と道徳の相違はどこにあるのであろうか。デュルケームはそれをたんに形式と内容と区分する見方ではないという[40]。本来の道徳に固有なものは，ある種の行為の仕方に結びつき，それにその刻印を与える義務の形式である[41]。この義務は一定の条件で経済現象にも伴うのである[42]。たとえば，集合的効用が明かに証明され，その経済現象が時間の経過とともに聖化されてくると，それらは義務的なものとなり，また法的または道徳的規定となって現れることがある[43]。こうして社会の容量がまし人口が増加すると，土地の生産力を高めることが義務づけられ，集約的耕法が土地の個人所有とともに社会の責任となってくる[44]。私的所有権がだんだんと神聖な法となるのはこうしてであり，道徳学者もこれを明かに認めるように，法の制裁の対象となる。「われわれが同一の行為を何度もくりかえすとき，その行為は自然に同じように反復されるようになり，こうした慣習の結果，われわれはその型に従って行為することを義務づけられていると感じるようになる[45]。社会関

係についてもこれと同じことがいえる。社会関係も最初の試行錯誤や不安定期もすぎて，経験的に見て最上の形をとるようになると，人間はこれに従うようになる。「ところがその義務の力が生ずるのは慣行の権威によるばかりでなく，またそれが公的な効用によって必要とされているという意識にもよるのである。習俗 Sitte はこうして形成されるが，それが道徳や法の萌芽となるのである[46]。」「経済現象もまた余り硬直的な形にとじこめられることはないが，ある形に結晶化する[47]。」われわれが生活する環境が複雑になり流動化するに従って各人の創造性や自発性が必要となることはいうまでもないが，しかし経済界において渾⅓と不統一が支配することは許されない。「活動的な経済規象も一度その動く道床ができると，それを蘊意的に変えることはなくなる。こうして経済現象も時とともに一定の形をとることを義務づけられ，漸次道徳現象となる[48]。」シュモラーたちはこのように道徳と経済現象の密接な関係を理解する。だから「たとえば所有権，契約，労働などに関する道徳的格率はその由来する経済条件を認識しなければ少しも理解できないし，また経済発展もそこに介入する道徳的な動力因を無視しては正しく認識できない[49]」のである。さらにデュルケームは講壇社会主義者たちが「今日の社会の現実の状態において，自由が道徳的によいものとされるのは，それが制限されているからであると認めていること[50]」を重視するのである。結局，これら経済学者たちは道徳を経済学と根本的に分離することが不可能であり，それが現実の経済社会と強く結びついていることを明らかにしていることをデュルケームは学びとるべきであると考えた。それ故，デュルケームは「社会学講義[51]」においても「ドイツ学派は経済現象が私的機能ではなく，社会的機能として作用していることを[52]」確認したが故に社会主義への傾斜を示したのであると見，「ドイツの経済学者，法律学者とともに社会学は個別科学となった[53]」であるとして，社会学の成立の一つの基礎をそこに見出したのである。だから，デュルケームのこれらドイツの講壇社会主義者やシェフレを含めた経済学者についての研究はその社会学の基礎を固めるための努力の一つであったのである。

なお，道徳についての経験的な方法による接近のほか，デュルケームがシュモラーに注目したのは後者の分業についての研究で，デュルケーの「社会分業論」にはシュモラーに対する言及，引用はいくつかみられる[54]。ところで，この二人の間にはその後と意見の交換は続いたようで，シェモラーの見解がデュルケームの考え方に影響を与えた後，シュモラーはその著作においてデュルケームの「社会分業論」にのべられた考え方を利用しているのである[55]。だからこの二人の間の交渉は余り単純に考えてしまうことはできないのである。

III

デュルケームの社会主義の研究は，以上のべたドイツのだけではない。デュルケームはボルドー大学における 1895－96 年の講義において「社会主義」をその題目に選んでいる。それは「社会主義の歴史」となることを予定されたものであった。この講義は〔I〕にのべたようにデュルケームの死後「社会主義」*Le socialisme* として刊行されたが，講義が行われたのは 1900 年代より以前だから，デュルケームの初期の研究の成果であるといえる。このことは案外わが国においては注意されていないが，重視されるべきことである。この著作は一部社会主義の定義と起源，二部サン・シモン，その生涯，サン・シモン学派，から成っており，その一部の一つの章はド・シスモンディ *Sismondi* にあてられている。この講義は，しかし，デュルケームの構想によればもっと大きくなるべきものの一部でしかなかった。従ってこの著作は完成したものではないのである。モースは社会主義への序文において，「デュルケームが他の著作（「社会主義」や「自殺論」など）の仕事から解放されて 1895 年「社会主義の問題に立ち戻ったとき，この問題を純然たる科学的見地から考察することから逸脱しなかった。」[56]とのべているように，デュルケームは社会主義を社会学の問題として扱った。つまりデュルケームにとっては社会主義イデオロギーを事実として説明することが大事であると考えられていたのだが，そのためには，「サン・シモン，フーリエ，あるいはロバート・オウエン，マルクスなどのような思想家

をして，政治的経済的道徳および行動についての新しい原理をひき出させるにいたった社会的事実の分析を行うことが必要である[57]」と考えられていた。そして，1896－97年の講義にはフーリエやプルードンについて講義が準備され，この二人の著作を研究されていた[58]。さらに第三年目にはラッサールやマルクスにまで講義を続けるつもりでいたのであった[59]。しかるに1896年以後デュルケームは「社会学年報」の仕事にとりかかることになったため社会主義の歴史は未完成のままゐ終ってしまったのである[60]。こうして「社会主義」はサン・シモンまでで終ってしまったのであるが，その前にド・シスモンディを扱ったことは注意さるべきことである。ド・シスモンディに関する論及は「社会主義」の中の一つの章にまとめられているが，この章は18世紀の社会主義者を扱った章に続いている。ド・シスモンディを扱ったのは，18世紀の社会主義者たちの考えた社会主義が共産主義とはほとんど変っていないのに比べて，彼が社会主義の本来の考え方である，経済的機能がすぐれて社会的機能であることを明かにした学者であることによるのである[61]。デュルケームによると，ド・シスモンディは19世紀になって「事物の勝利の時代と認められる時代に，人間が今までに見られぬほど強く区別されていることを見てとったのである[62]。」事物の勝利の新しい時代は労働者を幸福にしたであろうか。ド・シスモンディは否と答える。そしてシスモンディは工業主義 *Industrialisme* の古典的な国であるイギリスにおける労働者の悲惨な生活を描き出す。そうした労働者と異って企業主や親方たちは幸福になったのであろうか。この問に対してもシスモンディの答えは否である。それは結局工業と商業の増大する集中の結果によるのである。工業活動の異常な旺盛 (*hyperactivité*) にも拘らず，生産者ばかりではなく消費者も幸福ではないのである。ド・シスモンディによると，それは社会の組織が下層の大衆の提供する労働を彼らに最低の生存以上のものをもたらさないような仕組にくみいれられているからなのである[63]。生産と消費が正確に均衡がとれることが集合的福祉には含意されているが，新しい工業制度はこの均衡が規則的に確立することに反対している[64]。こうした状態から生ずる危機に対し社会

改革が提案されたのであるが，ド・シスモンディの特徴は「蓄積された富は消費の需要をこすに応じて，富であることをやめるのである。この過剰生産を道徳に反するものと見たのではなく，富が無制限に増加すると富ではなくなり，またその存在理由である目的に反することになる[65]」が故に却って貧因をもたらすことになるとみたことにある。シュンペーターはド・シスモンディについてその「経済分析の歴史」において次のようにのべている。

> ド・シスモンディの著作[66]は直ちに殊にリカルドー学派から批判的な注目をうけた。時勢が後者に反対となってくるとともに，ド・シスモンディの名声は着々とましていった。……これは分析的業績とはほとんど関係のない彼の態度によるものであった。実に彼は経済学の真の客観が富でなく，人間であるという福音を説いたのであった。彼はリカルドー学説を単なる貨殖術であると攻撃した。彼は全面的に労働者の味方であった。……しかし，ここに附加する必要があるのは，彼が事実において後代の社会政策の最も重要な先駆者の一人であったこと，また彼の勧告の若干は彼の最も真正に独創的な貢献であったことの二点である[67]。

デュルケームはド・シスモンディからは後者が生産が無規制に行われていることの危険に対する指摘とそうした経済界の無秩序状態に対する国家の介入の必要を提言したことを学びとったのである。だからデュルケームはド・シスモンディにおいては，共産主義者の考えたように工業の役割を制限することが問題となっているのではなく，工業がもっと効果的に生産を行うようにすることが問題になっているのである点[68]を重視するのである。と同時にわれわれはド・シスモンディにおいては「社会分業論」でデュルケームが提案した「同業団体」による産業社会の再編成に対する示唆は存在しなかったことにも注意すべきであろう。デュルケームはド・シスモンディから市場における需要と供給の作用を通して均衡が達成されるという法則は妥当しないことを学んだといわれるが[69]，それは産業社会のアノミー状態についての問題意識とまったく関係がないとはいえないであろう。とくに初期工業化社会における景気循環から生ずる慢性的危機についてのド・シスモンディの指摘はディルケームの関心を強く湧き立たせたものといえるのである。ところでド・シスモンディについて

の研究は社会主義の研究の第一歩でしかない。デュルケームはこれをきっかけとしてサン・シモンの研究に進んでいくのである。サン・シモン研究は社会主義の学説史の上からは当然のことであるが，しかしそれはコントに対する理解を深めるためからも当然なさるべきことであった。デュルケームは別の論文「19世紀におけるフランスの社会学」においても，コントを十分理解するためには，サン・シモンに遡る必要があること[70]を明言しているのである。しかし，デュルケームがサン・シモンを学んだのはコントを学んだ後であって，サン・シモンに対する研究着手はドイツにおける講壇社会主義の研究から刺戟を得たものであるということができるであろう。ところでサン・シモンの中にデュルケームの認めたことは実証主義 *positivisme* の創設者，近代的産業制度の起源を明かにし，産業主義の基礎を確立しようとした思想家であるということである。サン・シモンによると「人間による人間の搾取」は，過去における人間関係の状態であるが，未来の示す展望は「人間と人間の結合による自然の搾取なので[71]」ある。がこうした未来実現のために現在提起されている社会問題 *questions sociales* は金銭や力の問題ではなく，道徳的行為主体の問題である[72]，ことを出発点としなければならない。従って，今日のフランスの経済状態よりはフランス人の道徳意識の問題がより大切なものだったのである。デュルケームはこうして，サン・シモンの学説における四つの要素・歴史的発展，実証哲学，社会主義理論および宗教的革新への願望は結局道徳的規制力によって統一されるものとみるのであるが，この規制力は個人に由来するものではなく，社会に由来するものであることが重視されている。こうして国家は道徳的権威によってこの規制を行使できるのである。それ故に，デュルケームがサン・シモンの社会主義から学んだことも結局はその道徳的規制の重視なのである。しかもデュルケームはそうした道徳的勢力の確立のため，サン・シモンが新しい宗教的基礎を与えようとしていたことを明かにしている[73]。そしてさらに，サン・シモンにおいてはこの宗教的基礎，とくにキリスト教的原理に裏付けられた産業主義が国際的性格を目ざしていたことも強調されるのである。デュルケームのこうした解釈が，

サン・シモンを空想的であるとしか見なかったマルクスのとはいかに異ったものであり，しかもいかに真実を正しくみたものであることであろう[74]。デュルケームはこのように，初期の著作において社会主義の問題を熱情を傾けてとり扱ってきた。彼は社会主義を「急激的にではあれ，漸進的であれ，経済的機能を現在それがおかれている拡散的状態から組織状態へ移行させようとする傾向である[75]」と定義している。デュルケームはさらにこのように規定された社会主義はまた諸々の経済力の多かれ少なかれ完全な社会化に対する願望であるともいえるであろうとのべているが[76]，社会主義はこうして無秩序状態に放置されている経済的機能を国家の手によって組織化しようとする試みとしてみられたのである。それはデュルケームが社会改革に対して深い関心をもっていたことを示すものであるが，同時に彼自身は社会主義者ではなかったことも注意されなければならない[77]。彼は社会主義をある一定の社会における人々の強い要求の表現であるとみ，社会的事実として研究のでが，社会主義をある一定の社会における人々の強い要求の表現であるとみたのであった。ところが，初期の社会主義に対する研究は彼の社会学の理論に対してどういう意味をもっていたのであろうか。とくにドイツにおける講壇社会主義研究から学んだものは何であったのだろうか。また，社会主義はデュルケームの社会学にとってどういう意味をもっていたであろうか。その点を次の結論において明らかにしていくことにしよう。

IV

デュルケームは「社会分業論」の第一版序文において，「社会学者の行う研究の努力は，もしそれが思索的な意味しかもちえないものだとすれば，一時間たりと骨折りをするには値しないであろう[78]」とのべ，学問的研究も現実を改造しようとすることを断念すべきではないことを明言している。しかし，デュルケームはその次ぎの箇所で，「われわれが慎重に理論的問題を実践的問題から区別したのは，後者をおろかにするためではなく，それらをよりよく解決するため

である[79]」と附言している。こうしてデュルケームは，社会分業の科学的研究に着手したのであるが，彼においては科学的研究とこうした実践的な問題解決への意欲とは相並行するものなのであった。ところで，デュルケームはそのため，社会分業は道徳に属する事実であるとしながらも，その研究に自然科学的方法を適用することを明かにした。デュルケームは社会分業をアダム・スミスのように各人に利益をもたらすという面からではなく，それが社会の成員の連帯を強化するという面から見ていこうとしたのである。それは分業という経済生活に関係する現象の社会的機能を確定していくことから始めることを意味するのである。このように，道徳生活に属する事実に対して自然科学的方法を適用しようとすることを，デュルケームはドイツの講壇社会主義から学んでいるのであり，かつまたこれらドイツ経済学者たちが経済現象の社会的機能を追求したのにならって，分業の社会的機能－連帯への貢献－を明かにしようとしたものであるとみられる。このようにデュルケームに対するドイツの経済学者たちの影響は非常に大きいものがあったといえるであろう。何故なら，シュモラーやワグナーは経済と道徳の相互作用を明かにしたのみではなく，社会の全体性と各部からの相互の必然的結合関係を明かにしたからである。つまりシュモラーやワグナーは社会の有機的全体性の優位を力説し，この全体が構造原理という特性をもっていることを明かにしたからである。つまり，シュモラーたちは「社会について一つの包括的理論 *Une théorie globale de la société* を明白にもっていたのである。だから，デュルケームがこれから講壇社会主義理論から学んだのは，社会主義的政策の内容よりはむしろ「社会的なもの」について考え方であったといえるのである[80]。」アスウンによれば「講壇社会主義はあらゆる面から，社会的全体性 *totalité sociale* の概念を第一面に出していたのである[81]」。しかもこの社会的全体性という概念を明かにしたのは，講壇社会主義たちの国民社会」*nation* という概念である，とアスゥンはいう[82]。ところで，デュルケームはそうした意味をもつ「国民社会」の概念の起源はリストにあるとの指摘した 1903 年にかかれた論文「社会学と社会諸科学」において次のようにのべてい

る。

「リストは，保護主義の正当性を確立するため，自由主義経済の個人主義および世界主義 *cosmopolitisme* に反対してたたかい，経済学の国民的体系は人類と個人の間には，固有の言語，文学，制度，慣習および過去をもつ国民社会が存在することを原則として認めているのである」。[83)]

デュルケームが方法論において，コントの人類に代って国民社会こそが真の社会学の対象となるものであることを確立したのは，しかしながらドイツから学んだものであるのだろうか。アスウン解釈においてはそのように解されるところが見られる。しかし，*nation* という概念自身はフランスでも普跪戦争における敗戦後おこったナショナリズムの動きとともに強く意識されていたから，それまでをドイツからのものとみる必要はないであろう。ただ，デュルケームも明かにしているように，リストにはじまった国民経済 *Volkswirtschaft* の考え方がシェモラーやワグナーなどにもうけつがれ，より練成されたであろうことは当然である。しかしデュルケームが学んだのは *nation* ということではなく，むしろその有機性を通じてであろうが社会の全体性，有機的統一性であるとみるべきであろう。それによって個人の特殊性には還元されないし，また人類という普遍性にも還元されることのない独自の現実 *réalité spécifique* としての社会の全体性はより明確にされたのである。

デュルケームはこうした社会の全体的統一性を講壇社会主義者から学んだのであるがドイツの経済学者に対して全く無条件的に賛成していたのではなく，批判的に見ることも忘れてはいなかった。[84)]それは次のいくつかの点にみられるのである。

第一はワグナーやシュモラーが立法者の措置に対して過大な信頼をおいていたことと専制的な方法に対する選好が多くみられる点である[85)]。デュルケームは彼等が「道徳的現象は物的事物の中に起源をもつものでなく，人間の意識の中に起源をもつものであるから，道徳現象は人間の意志によって自由に操作できる人為的な結合とみた[86)]」ため，人間の意志活動の優位を認め，それから立法

者の活動を重視しすぎることになったのであると批判する。デュルケームの立場からは道徳現象がこのように蘊意的に変更されることは認められなかったのである。デュルケームは自然法則と社会法則との間に質的相違をみようとしたドイツの経済学者たちと異って，程度上の相違しか認めなかったこである。それ故，デュルケームにとっては講壇社会主義の立場を克服することが必要であった。彼はその手がかりをシェフレに見出したのである。何故なら，シェフレは「道徳的観念に対して，ワグナーが認めたような過度な柔軟性は認めることはなかった[87)]」からであるし，また「ワグナー，シュモラーにとっては社会は少くとも一部は外から動かすことのできる機械であったが，シェフレとともにそれは真に内部から動く生物体となった[88)]」からなのでもある。そして，同時にシェフレにおいては，立法者の任務は法則を確認し，明瞭に法を定式化するだけにとどまり，蘊意的な介入はできなくなるのである。そしてシェフレの真の目的は労働者の生活を少しでも改善しようとすることではなくそれよりも高いところにあった，つまり「個人主義の実践が生み出す分散的傾向を一般的に打破しようとすること[89)]」にあったのである。デュルケームはこのようにシュモラーよりもシェフレの有機体的な考え方に進歩を認めていたともいえるのである。しかしデュルケームはドイツから帰国してから17年たった後に発表された論文[90)]で「シュモラーとビュッヒャーとともに経済学が経済類型の設定によって新しい方向に向いだした[91)]」ことも認め，さらにシュモラーが一般経済学要綱 *Grumdriss der allgemeinen Volkswistschaftslehre* において行った総合の試みは，経済学からみた，社会学の試みであると認めている[92)]のである。われわれはここでデュルケームがシュモラーやビヶッヒャーの経済類型設定を重視していたことに留意しなければならない。そしてこの類型設定について，デュルケームは歴史学者が「所与の事実の極度の多様性に圧倒されることはなく，各種の民族や時代における同一の機能を研究するときに現れる類型の小数なことや一種の僅少さに驚かされる[93)]」とのべているが，このような試みがシェモラーやビュッヒャーによってうまく適用されていることを高く評価しているのである。

いずれにせよ，デュルケームは講壇社会主義の社会理論を彼の企図している社会学への一つの貢献とみていただいたことは否定できないのである。デュルケームの社会学思想をドイツ製であると酷評したドプロワージ Deploige は「デュルケームのドイツ滞在は彼の科学的未来のためには決定的であった[94]」とのべている。決定的ということの意味はいろいろにとれるが，シュモラーなどに対するデュルケームの摂取の仕方からみると，彼がとくに注目したところは講壇社会主義者の政策だけではなく，むしろ社会的なものについての考え方であったとみるべきで，その意味では重要であった[95]。

しかしもう一つデュルケームがこれら社会主義の学者から学んだと見られる重要なことがある。それは国家の役割に対する認識である，ワグナーやシュモラーに関する論述[96]においては国家の役割についての問題は大きくはとりあげられていないが，シェフレの社会主義論に関する報告において[97]，デュルケームはそれが「従来経済生活が反射的作用の全体としか見られていなかったのを社会有機の意識的中央機関 centres conscients に結びつけたらどうなるか」の研究であると見，それが社会主義思想の客観的研究であると評している。社会有機体の意識的中央機関とは国家のことである。デュルケームは社会主義とは「経済的機能を組織的状態に移行させようとする傾向である」と定義しているが，そうした組織化されるためには中央規制機関としての国家が必要なことを明白に認めている[98]。デュルケームの社会学体系全体の中において国家に関する考察が重要部分をしめていることを筆者は別のところで明かにしたが[99]，それについての異論はないといってよい。デュルケームがこうして産業の発達した社会における国家の役割について深い関心を抱くようになったのにも，社会主義理論についての研究が大きく作用していると見るべきである。レイモン・アロンはデュルケームが社会学を社会主義に対する科学的反対理論 contrepartie scientifique として考えたとのべていう[100]が，そのために社会主義を研究したのであるといえるのである。

V

最後に，デュルケーム自身，彼がドイツから学んだことに対してどのように評価していたのか，その点にるれておこう。

第一，「ドイツにおける道徳の実認研究[101]」に関する報告の中で，デュルケームは，「ドイツ学派の試みは道徳科学における演繹法を使用することに対する抗議であり，この学問領域に真に帰納的方法を定着させる努力である[102]」とのべ，帰納的方法を彼の社会学に導入させるための支持を見出したことを大きい収穫と認めている。そして1902年に *Mercure de France* 誌のアンケートに対する回答で「個人的には，私はドイツの学者に負うところが多い。私が社会的現実，その有機的複親性や有機的発展についての感覚を得たのは，一部分ドイツの学者から学んだところである[103]」といい，ドイツの学者から学んだところをはっきり認めている。そしてさらに同じ回答の中で「私は彼等との接触によって，フランスの学者たちの考え方の狭さをよりよく理解できた。とはいってもフランス学派が余りにも単純であることを認めたからといって，フランス学派の重要性を否定するつもりはない[104]。」という。さらにデュルケームは「ただしこれは過去のことであって，現在では少し以前からドイツの学問もその方式を更新できない状態に陥っているという印象を得ている。わが国でも社会学研究は多くの業績を産み出しているが，ドイツでは代表的な人は余りでていない，18年前私がはじめて研究生活にはいったとき，ドイツから光明を期待していたことを考えると，この事実は注目すべきことである」と評している。しかるに，1097年カトリック派ドプロアジ Deploige からデュルケームの道徳に関する理論はドイツのの再生にほかならないという非難が[105]あびせかけられた。これに対してデュルケームはこの非難をのせた *Revue néo-scolastiqne* 誌に対して「私はドイツにおける道徳の実証研究についての報告でドイツの学者の貢献を少し誇張して重視しすぎた。私の扱ったドイツの学者は社会学者ではないが，しかし彼等の著作は社会学の進歩に貢献できるものと考えている。しかしドプロワー

ジュの指摘には重大な談診がある」として抗議している。さらにこの点の例をあげて次のように反論している[106]。

「1．私が Ecole des Hautes Etudes Sociales で行った講演がジンメルの *Einleitung in die Moraluissensehaft* の借り物だというが，私はこの本をよんではいない

2．私はワグナーやシュモラーの講義をきくためドイツにいったと何度もかかれているが，私は二人の著作にドイツ留学中感銘をうけ，強く影響されたから，それを報告したにすぎない。二人とは個人的には接触はしてない。

3．私の社会実在論 le réalisme social はシェフレに学んだといわれるが，これは誤りで，その点はコント・スペンサー，エスピナスに学んだのであり，それはシェフレより以前からのものである。またエスピナスにも社会実在的見方があるのは，彼がドイツ社会学に通じていたからであるとドプロワージは暗に仄かしているが，エスピナスがその動物社会 *sociétés animales* をかいたとき，彼はシェフれも知らなければ，ドイツ語も十分勉強していなかった。

4．私が社会学と心理学の区別をしたのはヴンドから借りたといわれるが，それはブートルー E.Boutroux から得たのである。また宗教が道徳法律思想の母型であるという考え方をヴントから学んだというか，ヴントから学んだのは彼の Ethik であり，しかもそれは 1887 年によんだものである。私が社会生活における宗教の重要な役割についてはっきり感じたのは 1895 年で，それはロバートソン・ミスや英国学派もの学んだからである。

5．私は自分の考え方か先輩先人に負うことが大きいことを知っている。しかしその先人はドプロワージの考えているのと異っている。私は講壇主義者から学んだが，は社会学に対して同情的ではなく，その原理を否定しているから，むしろそれに対して反感さえ覚えている。

さらに，デュルケームはドプロワージの著書 *Le conflit de la morale et de la sociologie* 1911 における非難に対して次のように答えている[107]。

1．社会学にはドイツの役割が圧倒的に優勢であるというが，それはまったく

根拠がなく，とくにコントの著作はわれわれにとってはシュモラーやワグナの少し不明確な思想よりはずっと深い影響を及ぼしているし，さらにその前にルヌーヴィエの影響があり，「全体はその部分の総和より大である」といい公準も彼に由来するのである[108]。2．宗教現象についての研究の源泉はイギリスおよびアメリカで，ドイツではない。いずれにしてもドプロワージの非難は事実の歪曲に基づくものである。

以上みたように，年の経過とともにデュルケームのドイツの学者による影響に対する評価は多少減じているようにも見られる。しかしそれはアスウンのいうような大きい変化とは考えられない[109]。もっともこういう問題は，ドイツの経済学者，講壇社会主義者の著作（デュルケームが言及した）をもっと詳しく研究してみなければ判断できない点を多く包蔵している。いまそこまで立ちいることは容易な仕事ではない。大切なことは，デュルケームが社会主義に対して深い関心をもち，「社会主義理論を近代社会のイデオロギー的随伴物，優れた人物による工業社会秩序のある必然性に対する自覚としてみていた」[110]ことである。デュルケームはたしかに社会主義の道徳的願望の中に慈善心の残存と正義への郷愁と認めていたのであるが，しかし慈善心や正義に対する社会主義思想家たちの感情にはまったく賛成していなかったのである。そしてデュルケームがドイツから学んだと見られる社会的現実，その全体性に対する感覚は彼がそれより前にコントやルヌヴィエから学んだことの確認であったことも考えられる。が同時にそれが彼の社会主義研究を促進させる機縁となったことも認められなければならない。その意味ではデュルケームによるこうした初期の研究のもつ意義をもう一度十分考え直してみることが必要である。小林幸一郎の「初期生成におけるデュルケーム社会学思想[111]」においてもこの点について十分な言及はない。こうした点問題がもっと本格的にとりあげられなければならない問題である。

参考文献

著作

E. Durklrerin, *De la division du travail social* (édit de 1964)

〃 *Le suicide*

〃 *Le socialisme* (édit de 1971)

〃 *L' Education morale*

〃 *Textes,* I, II, III (1975)

J. C. Filloux (ed) *La scienee sociale et l'action* (1970)

デュルケーム,「モンテスキューとルソー, 附初期社会学論集」小関, 川喜多駅 (1975)

Y. Nandan, *L'école durkheimienne et son opus* C. N. R. S. P. 1975.

CLaude Digeon, *la crise allemamde la pensée framcaise* (1870−1914) P. U. F. 1959.

E. Durkhein, 'Sociologie et scienees sociales' *Revue philosophique*, 1903.

論文

B. Lacroix et B. Landerer, 'Durkheim, Sismoudi et les socialistes de chaire' *Année Sociologigue vol,* 23 1972, p. 159−204 P. L. Assoun, 'Durkherim et le socialisme de la chaire '*Revue fralçaise de science politique* 26. 1976 n 5, pp. 957−982.

Raymond Aron, Allocution "sociologie et socialisme *Annales de l'Univerrsité de Paris* 1960, pp. 33−37.

註)

1) *De la division du trauail social,* の略

2) *Les régles de la méthode sociologique* の略

3) *Les formes élémentaires de la vie religieuse* の略

4) この著作には外交文書から見た戦争の起源泉 *Les origines de la guerre d'aprés les documents diplomatiques* の副題がついている。

5) Durkheim の既刊著作は戦争協力のものを除けばすべて P. U. F. の出版である。

6) Ferneuil の著 *Les primerripes de 1789 et la scienee soeiale,* 1889 の書評

7) G. Richard, *Le socialisme et la science sociale,* 1897 の書評

8) A. Labriola, *'Essai sur la conception matérialiste de l'historie,'* 1897 の書評

9) 書評というのは Analyses et Comptes-Rendus をさすものである。

10) Nandan,p. 124.

11) 以下「年報」と略す。

12) *Revue Philosophique,* 19 (1885) pp. 84−101.

13) *Ibid,* 20 (1885) pp. 344−354.

14) *Ibid,* 20 (1885) pp. 446−453.

15) *Revue d'économie politique,* 11 (1888) pp. 3−8.

16)年報におけるデュルケームの書評には宗教，家族に関する著作に関するものが多くなっている。

17) Mauss, Introduction au *Socialisme p. 27* 18) B. Lacroix et B. Landerer, 'Durkheim, Sismondi et les socialistes de la chaire '*Année sociologique,* vol 23, 1972 p. 163.

19) Le programme économique de Schäffle *Revue d'économie politique 1888 Durkheim Textes, I. p. 378.*

20) デュルケーム，社会学講義 *(*邦訳モンテスキューとルソー *p. 178－179)*

21) 同上（邦訳 *p. 182*）

22) *G. Schmoller, Principes d'éconmie politique* 1905. t 1 p. 24 (cilé par B. Lacroixes B. Landerer, op cit)

23) J. C. Filloux, Introduction, *La science sociale et l'aetion* p. 16 註

24) 'Le programme économique de Schiffle, *Textes* I. p. 380－381 なお シュンペーターの「経済分析の歴史」においても，シェフレは社会を生物学的有機体との類推によるタームで実り深い分析ができると考えた経済学者として注目している。（第5巻，165頁）

25) 'Le science positive de la en Allemagene' *Revue philosophique* 24, (1886) p. 45 (*Textes*, I p. 280－281)

26) *ibid,* p. 46 (*Textes* p. 283)

27) *ibid, Textes* I, p. 379.

28) *ibid,*

29) *ibid,*

30) *Revue philosophique,* 24 (1887), pp. 33－58, 113－42, 275－284, (*Textes* I, pp. 267－343) もう一つは「ドイツ大学における哲学」である。この報告の中でデュルケームはワグナー，シェモラーのほかシェクレ，イエーリング，ヴント，ポストの学者の研究をとりあげている。

31) *ibid, Textes* I p. 270－271.

32) *ibid,* p. 272.

33) *ibid,*

34) *ibid,* p. 273.

35) *ibid,*

36) *ibid,*

37) *ibid,*

38) *ibid,* p. 274.

39) *ibid,*

40) *ibid,* p. 275.

41) *ibid,*

42) *ibid,*

43) *ibid,*
44) *ibid,*
45) *ibid,* p. 275.
46) *ibid,*
47) *ibid*
48) *ibid,* p. 376.
49) *ibid,*
50) Cours de science sociale (邦訳モンテスキューとルソー p. 155−194)
51) 同上 p. 180.
52) 同上
53) 社会学講義（邦訳モンテスキューとルソー）p. 182.
54) たとえば *De la division du travail social*, 1964 p. 9, n, 1 および p. 165 など。
55) B. Lacroixet B. Landerer, op, cit, p. 166−167.
56) Mauss, Introduction au *Socialiime,* p. 28.
57) *ibid,*
58) *ibid,* p. 24.
59) *ibid,*
60) *ibid,* p.30.
61) デュルケームはド・シスモンディを論じたのは，社会主義についての定義に関する結論においてである。
62) *Socialisme* p. 100.
63) *ibid,* p. 101.
64) *ibid,*
65) *ibid,* p. 106.
66) 経済学新原理 *Nouveawx principes d'écomomie politique*
67) シュンペーター，「経済分析の歴史」第三巻（東映精一訳）p. 1041.
68) Durk. Le soeialisme, p. 107.
69) B. Lacroix et B. Landerer, op, cit, *Année Socilogique* 1972 p. 184.
70)「モンテスキューとルソー」（邦訳）p. 205 なお，この論文は 1900 年に発表されている。
71) *Le Socialisme* p. 237.
72) *ibid,* p. 230.
73) *ibid,* p. 213−218 (Douzième leçon)
74) 'Sur la définition du socialisme' (*La Science sociale et l'action*, p. 233)
75) *ibid,*
76) *ibid,*

77) デュルケームは社会主義者ジャン・ショーレス Jean Jaurès と親友関係を結んでいたが，自らは社会主義者であるとなのったことはなかった。彼は「社会学方法の規準」において，このように解された社会学は意通俗的な意味で個人主義的でも共産主義的でもないとのべている。(*Les régles* p. 140−141)

78) *De la dirision du travail social* p. *xxxix*

79) *ibid,*

80) Paul-Laurent Assoun, 'Durkheimet le socialisme de la chaire' *Revue française de science politique* 26 (1976) p. 5.

81) *ibid,* p. 960 p. 96483 *ibid,*

83) 'La sociologie et les scienees sociales' *Revue philosophique* 1903. p. (Textes I pp. 147−148)

85) Textes, 1 p. 281−282.

86) *Op. cit,* p. 280−281.

87) *Op. cit,* p. 283.

88) *Op. cit,* p. 283−284.

89) 'Le programme économique de M. Schäffle', *Textes* 1 p. 379.

90) 'Sociologie et sciences sociales' *Revus philosophique,* 55, 1903 pp. 465−496 (*Textes* 1, pp. 121−159)

91) *op. cit,* p. 157.

92) *op. cit,* p. 158.

93) Textes, 1 p. 212.

94) S. Deploige, *Le conflit de la morale et de la sociologie* 1911, p. 128.

95) B. Lacroix et B. Landerer, *op. cit, Année Socilogique* 23, 1972 p. 162−163.

96) La science positive de la morale en Allemagne のことをさす。

97) Les études de scienee sociale (*La science sociale et l'action* p. 209)

98) Sur la défintion du socialisme (*La science sociale et l'action*, p. 233.

99) 拙著「デュルケームと近代社会」第4章

100) R. Aron, Allocultion, 'Sociologie et socialisme' *Annales de L'Université de Paris 30.* n. 1 (1960. Jan-pars) p. 33.

101) 'La science positive de la morale en Allemagne' *Textes* I.

102) *op. cit, Textes* I. p. 278.

103) *Mercure de France*, 44 n, 156 (1902) p. 647 (*Textes* I p. 400)

104) *ibid,*

105) *Textes* I, p. 401.

106) *Textes* I, p. 402−405.

107) *Année Sociologique* 12, p. 326－327.

108) なお，このデュルケームはドプロワージが社会的実在論というのはこのことをさすのであるという。

109) Assoun, *op. cit.*

110) *R. Aron, op. cit,* p. 35.

111) 社会学評論 63 号 16 巻（1966 年）p. 75－92.